

解説「フランスの高校生はどのように哲学を学んでいるのか？」

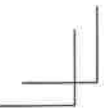
坂本尚志

本書はフランスの高校生向けに書かれた哲学の「教科書」である。しかし、日本のわれにとっては、高校生が哲学を学ぶとはどういうことなのか、想像しにくいかもしれない。

この解説では、フランスの哲学教育と、その目的であるバカロアの哲学試験について簡潔に説明したい。それによって、本書の背景をよりよく理解することができるだろう。

必修科目「哲学」

哲学は、高校3年生で初めて学ぶ科目である。フランスの高校は普通科、技術科、職業



科に分かれているが、そのうち普通科の全員と技術科のほぼ全員が哲学を必修科目として学ぶ。教育の内容は、国民教育省（日本の文部科学省に相当）によって定められている。ここでは、普通科の哲学教育の内容を説明しておこう。

ただし一点注意が必要である。2019年9月の入学者から、高校教育のカリキュラムが大幅に改革された。哲学教育も例外ではなく、内容に大きな変化が見られた。2011年刊行の本書は、2019年以前の教育内容をもとにしており、現行カリキュラムとは少し異なっている。

とはいえ、そのことは本書の内容が古いということではない。実は改革によって哲学教育の内容がかなり削減されたため、旧カリキュラムに基づく本書は、より幅広い哲学のトピックを扱っている点で有益である。

### 哲学教育は何を目指しているのか？

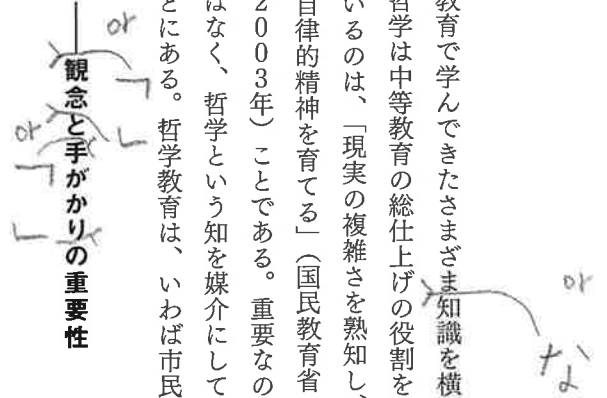
哲学を学ぶ意義の一つは、生徒が初等教育から中等教育にかけてさまざまな科目で学んだ知識を統合して考えられるようになることである。哲学は言語、芸術、科学、歴史な

ど、生徒がそれまでの教育で学んできたさまざまな知識を横断的に扱い、関係づけることができる。その意味で、哲学は中等教育の総仕上げの役割を持つ。

哲学教育が目指しているのは、「現実の複雑さを熟知し、現代世界に対する批判意識を働かせることのできる自律的精神を育てる」（国民教育省「高等学校普通科最終級における哲学カリキュラム」2003年）ことである。重要なのは、哲学史や哲学者たちの主張を網羅的に学ぶことではなく、哲学という知を媒介にして、批判的に思考し、明晰に表現する方法を習得することにある。哲学教育は、いわば市民を育てる教育である。

### 哲学教育の内容——観念と手がかりの重要性

旧カリキュラムでは、哲学教育の内容は「観念」、「著者」、「手がかり」という3つのカテゴリによって規定されている（新カリキュラムではこれら3つの上に「視座」というレベルが加えられている）。普通科文科系が学ぶ「観念」のリストを見てみよう。5つの領域の中にそれぞれ3つから6つの観念が配置されている。本書の章立ては、この5つの領域の区分に対応している。各章は、それぞれの領域に登場する観念のコンパクトな紹介



絶対的／相対的、抽象的／具象的、現実態／可能態、分析／総合、原因／目的、偶然／必然／可能、信じる／知る、本質的／偶有的、説明する／理解する、事実上／権利上、形式（形相）的／物質（質料）的、類／種／個体、観念的／現実的、同一／平等／差異、直観的／論証的、合法的／正当な、間接的／直接的、客観的／主観的、義務／強制、起源／基礎、（論理的に）説得する／（感情的に）納得させる、類似／類比、原則／結果、理論上／実践上、超越的／内在的、普遍的／一般的／個別的／個体的

「手がかかり」のリスト

高校3年生は、週3〜8時間哲学を学ぶ。時間数は文系理系等のコースによって異なる（新カリキュラムではコース分は廃止され、一律週4時間学ぶことになった）。それぞれの観念や手がかかりを個別に学ぶのではなく、哲学的な問題や文章の中に、どのようにそれらが現れ、どのように関係しているのかを学ばなければならない。

哲学の学習成果は二つの形式の練習によって評価される。ディセルタション（小論文）とテキスト説明である。ディセルタションは短い問題文に答える論述問題である。テキスト説明では15〜20行程度の著作の抜粋が問題文に対し、著者がどのような哲学的問題を扱い、どのような答えを提示しているかを、自分の意見を交えずに論述しなければならない。両者はともに一年を通じて宿題や試験として繰り返し出題され、生徒はその書き方を身につけていく。この二つの問題形式は、バカロレア（中等教育修了資格兼大学入試資格）試験

領域	観念
主体	意識、知覚、無意識、他者、欲望、存在と時間
文化	言語、芸術、労働と技術、宗教、歴史
理性と現実	理論と経験、証明、解釈、生物、物質と精神、真理
政治	社会、正義と法、国家
道徳	自由、義務、幸福

「観念」のリスト

次は「手がかかり」のリストである。こちらにも、本書の「哲学キーワード解説」がすべてを網羅している。このような対立概念や類似概念を駆使することによって、概念間の違いや類縁性をより精緻に理解し、議論を容易に組み立てることができるようになる。「手がかかり」はカリキュラムではただ羅列されているだけで、一見しただけでは何が問題なのかかわりにくい。ペパンは具体的な例や引用を豊富に用いつつ、それらに明快な説明を与えてくれている。

「著者」には60人弱の哲学者の名前が挙げられているが、ここでは挙げない。そのすべてを学ぶ必要はないが、それらの著者の著作から一冊ないしは二冊を取り上げ、授業中あるいは授業外で読むことは必須の課題である（これらの著者のうち10人がペパン著『フランスの高校生が学んでいる10人の哲学者』で取り上げられている）。

の哲学科目の形式でもある。哲学は知識を学ぶことだけではなく、こうした形式の問いへの答え方、すなわち考え方と書き方を学ぶ訓練の場でもある。

### バカロレア哲学試験——哲学教育のゴール

一年間哲学を学んだ高校3年生は、学年末である6月にバカロレアの哲学試験を受験する。2023年の問題は以下の3問であった。

1. 幸福は理性の問題か？
2. 平和を望むことは正義を望むことか？
3. レヴィー・ストロース『野生の思考』（1962年）の一節を説明せよ。

最初の2問がデイセルタシオン、最後の1問がテキスト説明で、この中から1問を選んで解答する。試験時間は4時間である。多くの受験参考書では、前半2時間は問題の分析や答案の構成を考える時間に充て、後半に答案作成と見直しを行うよう推奨されている。本書の「バカロレア試験対策アドバイス」では、どのように問題に取りかかるべきかが臨場感をもって書かれている。

誤解されがちだが、バカロレアの哲学試験は哲学的才能や独創性を試す試験ではない。そこで問われているのは一年間の学習の成果である。哲学的な論点や問題についての知識だけではなく、デイセルタシオンあるいはテキスト説明という問題形式に合わせてそうした知識を活用できる能力を持っているかが評価される。

デイセルタシオンにもテキスト説明にも、守るべき答え方がある。たとえばデイセルタシオンでは、問題の中の用語や概念を定義した上で問題を分析するという手続きを踏まねばならない。その上で、導入、展開、結論という3つの部分から成る答案を作成する。展開部分は正反合という弁証法的な構成をとっていることも重要である。

テキスト説明も、問題文が扱っているテーマを見分け、それがどのような議論の段階を経て、どのような結論を導いているのか、そして議論においてどのような異なる立場に対して著者が反駁しているのか等の論点を、問題文の単なる言い換えにならないようにしつつ明らかにしなければならない。

どちらの問題形式も、自分の意見や感想を自由に書くとはまったく評価されない。その意味で、フランスの高校生が哲学するとは、こうした「型」を身に付ける訓練をすることでもある。ただし、彼らにとっても哲学は難解で、合格点に達する答案を書けるのは受験者

の3割に満たない。当然だが、フランスの高校生が哲学を学ぶからといって、皆が哲学を得意としているわけではないのである（フランスの哲学教育については、拙著『バカロレアの哲学 「思考の型」で自ら考え、書く』（日本実業出版社）でより詳細に紹介している）。

### 本書をどう読むか、どう使うか？

最後に本書の意義をまとめておこう。フランスの高校生にとっては、哲学もまた詰め込みの対象である。多くの概念や議論、あるいは哲学者の引用を記憶し、適切に使えることが学習の目標になるが、同時にそうした勉強法によって生徒は、個別の論点やテクニクに集中することになってしまう。

本書の各章の議論は、（必ずしもカリキュラムには含まれていない）哲学者や作家の著作からの引用を挟みつつ、各観念の間の関連性を大きな視点で示すことで、こうした罣を回避しようとしている。

さらに、「質問と解答」では、クロードクエスチョンが多いバカロレア哲学試験の問題からは離れて、「なぜ」「どうやって」「どのような」といったオープンクエスチョンの

形式に答えることで、哲学的に考える実践の実像を示そうとしている。その意味で本書は、バカロレアの参考書でありながらも、それを超える自由な思考の実践へのいざないでもある。

哲学的に考えることに興味を持つ日本の読者にとっても、本書は非常に実践的な価値を持つている。バカロレアという現実的なゴールに立ち向かうための指南書であるだけにとどまらず、豊富な引用や具体例で彩られたその内容は、明快かつ有益である。「哲学キーワード解説」は物事を見る多様な視点を提供してくれるはずである。興味を持った引用については、その著作を読んでもいいだろうし、著者が挙げた問題や、自分が関心のある問題を考えてみることもいいだろう。

哲学は、世界のさまざまな事物を異なる視点から見るときの道具である。それはフランスの文化と歴史が育んだ道具ではあるが、本書のおかげで、われわれにとっても使い勝手のよい道具になるのではないだろうか。

（京都薬科大学薬学部准教授）